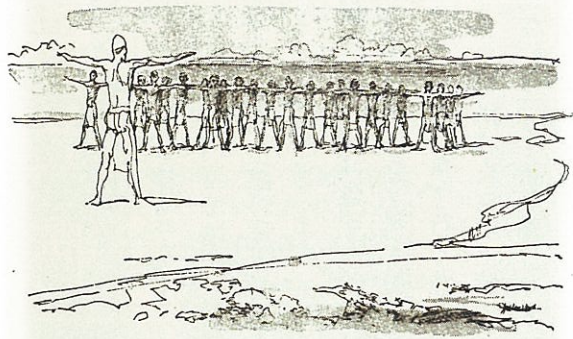


『夏草冬濤』あらすじ

◆上巻【一章】

中学生になった洪作は、ひとり三島の伯母の家に下宿して、沼津の中学に通っている。
 中学三年の夏休み、海に対する恐怖心から泳ぐことのできない洪作は、学校の水泳講習会に参加する。洪作は、五年生にポートで沖に連れて行かれ、飛び込み台の上に置き去りにされる。夕立の後、上級生の藤尾、木部、金枝がやってきて、洪作を助けてくれる。翌日、海への恐怖心が薄らいだ洪作は、深いところでも泳げるようになる。



◆上巻【二章】

二学期が始まる。洪作は、同級生の増田、小林とともに、三島から沼津までの五キロの道を、毎日歩いて通学をしている。始業の日の朝、「今日は靴は要らんぞ」と言われ、靴を通学路途中の神社の檜の木の下に隠しておく。帰りに探すと、靴はなくなっている。シヨックを受けた洪作は、三嶋大社などをうつろつ。翌日から、靴を持たずに登校する。数日後、朝礼で、靴が学校に届けられたことを告げられ、職員室に受け取りに行く。教室で皆に笑われる。

◆上巻【三章】

学校から保護者呼び出しの手紙が来る。靴のことか、成績のことか？ 伯母が学校に来る。成績はどれも少しづつ下がり、靴のことも伯母にばれる。落第点を取ったと思込んだ洪作は「もう、家へは帰らん」と言い出し、増田と共に、増田の親戚の家に行く。伯母に無断で行ったので、夜になって大騒ぎになる。

◆上巻【四章】

凶画の教師の眉田さんの授業で、校外

寺へ下見に行き、寺の娘の郁子と出会う。その帰り、かみきの家に寄る。蘭子とれい子がけんかする。二学期最後の日、通知簿を渡される。成績が下がっている。



東海道の松林の中を走るチンチン電車(伊豆箱根鉄道:写真提供)

を畑にしかけて農家の小父さんに怒られる。伊豆楼に泊まっている。瀬親子を訪ね、その上品な暮らしぶりに洪作は何もかも及ばないという気がする。風をひき、三島に帰る日を延ばす。子どもたちとどんどん焼きをする。自分の少年時代が過ぎ去りつつあるのを寂しく感じる。

◆下巻【九章】

三学期が始まり、久しぶりに同級生の小林、増田に会う。柔道の寒稽古では、上級生をやっつける。金枝、藤尾、木部が詩の同人誌の勧誘に来る。同人誌の会員になった。瀬に誘われ、藤尾に会い、木部、金枝も加わってラーメンを食べ、遊びの相談をする。洪作は、生き生きとした少年の群れに初めて接した気持ちになる。臨時試験の終わった日、藤尾たちに寺行きの話をし、寺へ行く決心をする。学年末試験前日、登校途中に増田、小林とけんかし、絶交する。

◆下巻【十章】

金枝に声をかけて、病気だという藤尾の家へ遊びに行く。木部、餅田もやってくる。藤尾を外に連れ出すため、窓から脱出する。千本浜に行き、歌を唱い、皆で駆けつこをする。藤尾が足を痛め、洪作は藤尾の家に知らせに行くが、逃げ帰る。洪作と木部は砂浜に仰向けになって語り合い、そのまま眠ってしまう。その夜、帰り

“夏草冬濤”ってどういう意味？



「思ふどち／遊び惚けぬ／そのかみの／香貴／我入道
 ／みなとまち／夏は夏草／冬は冬濤」と刻まれた詩碑が、井上靖文学館(上写真)、沼津文化センター、妙覚寺の3箇所にあります。「気心の知れあつた仲間同士で、我を忘れて夢中で遊んだ。その当時の香貴山、我入道浜、港町。夏は夏草が生い茂り、冬は冬濤が荒れていたなあ。」といった思いが込められています。

沼津から三島まで歩いて帰る。黄瀬川のあたりで、不安になりながらも見知らぬ男の自転車に乗せてもらう。翌日、増田、小林を誘い、蘭子とれい子のどちらがきれいかわからない二人を見に行く。御成橋の上で蘭子に会うが、三人ともときまぎれに笑ってしまう。

◆上巻【六章】



湯ヶ島から祖父が来て、成績が下がったため洪作を寺に預けるといふ話が出る。祖父とチンチン電車に乗って沼津の妙高

が遅くなり、伯母に心配をかける。洪作自身は一日の出来事に昂奮し、寝付くことができない。

◆下巻【十章】

四年に進級するが、成績は大幅に下がる。増田、小林から「上級生たちと遊ぶのをやめ、勉強しろ」と忠告され、けんかになる。不快な気分のまま、黄瀬川の神社で煙草を吸つてみる。藤尾が留年し、洪作と同じクラスになる。東京から転校してきた磯村の家に、藤尾たちとともに招待

主な友人等	
(湯ヶ島)	(沼津・三島)
(遊び仲間)	(通学仲間・同級生)
幸夫	増田 小林
龍男	(文学グループ)
芳衛	金枝 木部
(その他)	藤尾 餅田
光一	(その他)
あき子	郁子(寺の娘)
紋太	

され、フランス料理を御馳走になる。その帰り、皆で静浦から御成橋まで歩き、五月に旅行をしようという話になる。

◆下巻【十一章】

祖父が来て、寺行きが決定する。引越しのためのお金が届くが、机等を買わずに、旅行費用に回してしまふ。木部と妙高寺の下見に行き、活発な郁子にたじたじとなる。翌日、藤尾・木部と共に再び妙高寺に行き、郁子に寺の仕事をやられて散々な目に遭うが、てんぷらをこちそうになる。

◆下巻【十三章】

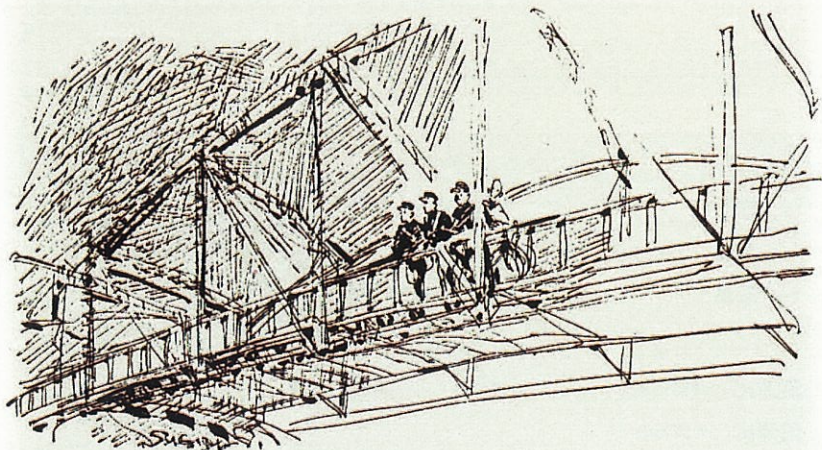
五月初め、三島の伯母の家を引き払う。妙高寺へ引越しの挨拶に行き、住職に旅行の許可を得る。郁子が追いかけてきて説教するが、木部は郁子に陶酔する。御成橋のたもとの船着場から出航し、洪作は金枝、藤尾、木部、餅田と共に西海岸への旅に出る。途中重寺で泊し、再び船に乗り、土肥港に上陸する。

◆上巻【七章】

年の暮れ。伯父の家に挨拶に行く。門野原の墓参りをして、嵯峨沢の湯に入る。伯父と話をし、一晩泊まる。近所の子どもたちを連れて、熊野山墓地の掃除に行く。上の家やおぬい婆さんの墓を掃除した後、西平側の斜面にある旧墓地も探し出して掃除し、祖先のことを考える。

◆下巻【八章】

正月。祖父と宮詣りをする。子どもたちと凧揚げ、山滑りをし、ひよどりの餌



挿絵は新潮社『夏草冬濤』初版本より(杉全直:画)